

自然体験活動が豊かな人間性、特に情意面に及ぼす影響に関する研究 ー特に小学生の「いのちの大切さ」「自然に対する感性」「達成意欲」など に関してー

澁谷 健治

(独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立能登青少年交流の家)

松下 俱子

(独立行政法人国立青少年教育振興機構)

【要 旨】

異年齢集団による自然の中での寝食を共にした「直接体験」の機会は、少年の感受性を豊かにし、人や自然とのかかわりを通して、「生命を尊重する心」や「自然に対する豊かな感受性」など、少年の情操、情意面に大きな影響をもたらすことが推察される。本研究は、かけがえのない成長期にある小・中学生の長期自然体験活動が、豊かな人間性の基礎となる情操や社会性などに及ぼす変容を調査することにより、自然体験活動の持つ教育的意義を検証するものである。

結果は、8泊9日の自然体験活動に参加した小学生とこれらに参加しない小学生の比較では、活動終了後に参加した小学生に「いのちの大切さ」「自然に対する感性」「達成意欲」で向上が見られた。また、普段体験活動や遊びの機会が多い参加者と少ない参加者の比較では、これらの機会が多い参加者がより向上した。

I はじめに

少年が直接的に加害者や被害者となる痛ましい事件が続発する中、少年の規範意識やモラルの低下、生命を大切にする心などの欠如が指摘されている。また、これらの少年には、豊かな自然や人と関わる「遊び体験」や「自然体験」などが不足しているとの指摘も多い。

少年による自他を含む生命をないがしろにした事件が発生するにつけ、学校教育においても道徳や心の教育として「生命の尊重」や他者への「思いやり」などに関する教育が行われているところであるが、青少年教育施設や地域社会においても、少年に対する体験学習としての「いのちの教育」が急務である。

本研究は、少年に関わる事件が続発する中、小・中学生の長期自然体験活動が、豊かな人間性の基礎となる情操や社会性に及ぼす変容を調査することにより、少年期における体験活動の重要性和自然体験活動の持つ教育的意義を検証することを目的に実施した。

なお、本研究では、情操とは真・善・美などのように、価値の高い事柄への志向性を伴う人の心の働き¹⁾を、「知・情・意」と並んで称されることが多い情意については、人の心の働きのうち、情緒・情動・意志²⁾、すなわち、知識や理解といった認知領域を除いた興味・関心、意欲、態度、価値観などの精神活動にかかわるものと定義した。長期の自然体験活動では、生活・活動を通して生きた自然と触れ合い、自身が他者との関係性の中で、

有用感や生きていることの実感が体験できること、自然の多様な営み、現象などから豊かな感受性が触発されること、不便な野外生活で立ちはだかる困難に仲間と協力しながらこれらの達成に向けての努力が求められること、さらに他者との長期間にわたる関わりから共感性がもたらされることなどの期待から、特に「生命の尊厳」「自然に対する感受性」「達成動機」「思いやり」を研究の中心に据えた。

Ⅱ 研究の方法

1. 対象者

国立夜須高原青少年自然の家（福岡県夜須町）が平成 16 年度に実施した夜須高原“遊・学キャンプ”に参加した小・中学生のうち、小学 5・6 年生 51 名を「経験群」とし、これらに参加しない福岡県内の小学 5・6 年生（104 名）を「対照群」として、実験計画法による質問紙調査の比較を通して、長期の自然体験活動がもたらす影響を考察する。また、表 1 の参加者を対象に日常における体験活動や遊びと各因子の関連について考察する。

表 1 《参加者》

	小 5 年	小 6 年	中 1 年	中 2 年	計
男	11	13	6	3	33
女	17	10	2	1	30

2. 夜須高原“遊・学キャンプ”の概要

(1) 実施期間

実施機関及びプログラムは表 2 のとおりである。この活動は、個人の課題学習とグループ活動からなり、各参加者は、「森の遊び」「森の科学」「森の冒険」「森の生活」「森の芸術」の 5 つのプロジェクトの中から一つを選択して、全期間、同じプロジェクト内で活動した。

(2) 調査の実施時期

質問紙による調査は、「経験群」については、活動初日（事前）と活動最終日（事後）、活動が終了してから 3 か月後の 3 回、「対照群」については、経験群とほぼ同じ 8 月初旬と 8 月中旬の 2 回、それぞれ同じ質問紙で行った。

(3) 指導と方法

各プロジェクトには、スタッフとして福岡県内の小・中学校の教諭・講師を 2～3 名、学生ボランティア又は同青少年自然の家職員を 1 名配置した。全日程にわたる活動内容、活動場所等については、参加者を中心に検討した。夜は、参加者が自分や仲間との活動でどのようなことに気づき、学んだかを明らかにするため「振り返り」の時間を設け、当日の活動で学んだことを次の課題や計画、目標などに生かすように配慮した。

(4) プログラム

表 2 『遊・学キャンプ』の日程・プログラム

期日	午 前		午 後		夜
8/4			開会 説明	グループ別 作戦会議①	一日のふりかえり (ロッジ泊)
8/5	テーマ別 個人学習	グループ別 作戦会議②	グループ別 作戦会議③	作戦発表会 やるキッズ宣言	同 上

期日	午 前		午 後		夜
8/6	同 上	グループ毎の計画によるグループ別『体験活動』			一日のふりかえり
8/7	同 上	同 上			同 上
8/8	同 上	グループ毎の計画によるグループ別『体験活動』		キャンプファイアー・中間報告会	
8/9	同 上	同 上			一日のふりかえり
8/10	同 上	同 上		パーティ準備	同 上
8/11	同 上	プロジェクトX 発表会 準備、午後の活動準備	各プロジェクト体感		レクリエーション パーティ（ロッジ泊）
8/12		後片付け プロジェクトX 発表会準備	プロジェクト X発表会	まとめ 閉会	

3. 調査の方法

(1) 「質問紙」の作成手順

1) 本調査に先立ち、「生命の尊重」「自然に対する感受性」「思いやり行動」「達成動機」に関する計 30 項目からなる質問紙を作成し、福島県内の A 小学校 5 年生（81 名）、B 小学校（96 名）計 177 名に質問紙に回答してもらった。

質問項目の作成に当たっては、「思いやり行動」については、佐藤³⁾の「向社会的行動尺度(児童版)」を、「達成動機」については、堀野⁴⁾の「達成動機測定尺度」の質問項目からそれぞれ一部修正して使用したほか、独自の項目を追加した。また、「自然に対する感受性」「生命の尊重」に関しては、「Ⅲ研究の結果」で述べる定義に即した質問項目を独自に作成して行った。さらに、これらの質問項目について、相互に関連する潜在的な要因を探るため、因子分析を行った。

2) 評定尺度については、「非常にあてはまる」から「ぜんぜんあてはまらない」までの 5 段階とし、それぞれ 5 点から 1 点に得点化した。

3) 回答された 30 項目の因子分析を行い、因子負荷量の低い「.40 以下」の項目を除外し、最終的に計 26 項目からなる質問紙を作成した。また、因子分析の結果、表 3 のとおり 5 つの因子が得られたことから、それぞれ「自然に対する感性」「達成意欲」「自己充実」「思いやり」「他者の気づき」と命名した。しかしながら、「生命の尊重」という概念は、生物的生命のかけがえのなさのほか、自分自身の存在を肯定できる自尊心や自己肯定感を含む概念として捉えることができることから、抽出された因子の「自己充実」と「他者の気づき」を合わせ、上位概念として「いのちの大切さ」とした。

(2) 調査票の信頼性

各因子のクロンバックの α 係数は、「自然に対する感性」0.88、「達成意欲」0.86、「いのちの大切さ」0.61、「思いやり」0.79 であり、内部一貫性における信頼性は十分と考えられる。

(3) 統計的処理

1) 質問紙の調査項目を作成するに当たっては、主因子法、バリマックス回転を用いた「因子分析」を行った。

2) 回収した質問項目が未記入の場合は、当該項目を欠損値とし、測定段階のそれぞれに対応するデータの比較に当たっては、これらの項目は算定上、全て除外した。

3) 経験群の「事前・事後・3 か月後」の平均値の有意性の検討には、一要因の「分散分

析」を用い、LSD 法による多重比較⁵⁾を行った。なお、この場合の有意水準は、5%水準を採用した。

表 3 因子分析結果

「主因子法、回転法は kaiser の正規化を伴わないバリマックス法」

因子名	質問番号・質問項目	1	2	3	4	5	共通性
自然に対する感性	19 自然の中はわくわくする	.77	.19	.15	.01	-.04	.65
	27 自然の中での活動は、気持ちがいい	.72	.21	.14	.09	.21	.64
	29 自然の力は大きいと思う	.70	.17	.09	.09	.12	.54
	3 自然は美しいと思う	.62	.30	.13	.18	.12	.53
	15 自然や森は不思議だと思う	.56	.26	.16	.19	-.22	.49
	11 自然の中に行くと新しい発見がある	.55	.39	.10	.18	.13	.52
	18 生き物の命は、ほかの生き物の命によって生かされている	.50	.11	.26	.06	.30	.42
	28 こういうことがしたいなあと思うとわくわくする	.44	.31	.39	.19	.27	.55
	7 夕焼けを見て感動する	.42	-.01	.23	.23	.24	.34
達成意欲	8 何でも手がけたことは最後までがんばってやりたい	.22	.70	.14	.11	.14	.59
	21 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたい	.22	.62	.20	.10	.04	.48
	22 自分より遅い友達がいたら手伝う	.15	.62	.17	.31	.16	.55
	12 結果は気にしないで何かを一生懸命してみたい	.38	.61	.04	.18	-.09	.56
	5 人に勝つより自分なりに一生懸命やるのが大事と思う	.25	.55	.15	.28	-.01	.46
	2 みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい	.16	.48	.42	.30	.03	.52
	25 進んでリーダーの仕事を手伝う	.14	.45	.35	.28	.40	.59
	9 困っている年下の友達を助けてやる	.19	.44	.32	.40	.03	.49
自己充実	26 自分は、他の人の役に立っていると思う	.27	.19	.65	.17	.27	.64
	20 今日一日、何をしようかと考えることは楽しい	.16	.25	.64	.22	-.05	.55
	23 木々の芽が膨らんできたのを見て、春が来たのを感じる	.48	.13	.56	.11	-.03	.58
思いやり	4 仲間はずれにされている友達をみたら、声をかける	.18	.20	.07	.80	.11	.73
	1 悲しそうな友達や困っている友達の力になってやる	.14	.33	.42	.59	.04	.65
	17 悪口を言われて人や、いじめられている人をかばう	.11	.27	.20	.56	-.04	.45
他者の気づき	14 私は、自分を大切に思ってくれている人に支えられている	.21	.25	.25	.19	.53	.49
	6 小さな虫を、何の気なしに殺してしまうことがある	.02	.11	.10	-.02	-.45	.23
	24 難しいことでも、自分なりに努力してやってみようと思う	.19	.21	.12	-.10	.45	.31
因子寄与（固有値／質問項目）		4.10	3.53	2.34	2.21	1.35	13.53
寄与率		15.78	13.58	8.98	8.49	5.20	52.03

因子のうち、「自己充実」「他者の気づき」を合わせ、上位概念として『いのちの大切さ』と命名した。

Ⅲ 研究の結果

1 長期自然体験活動参加者（経験群）と非参加者（対照群）の比較

経験群と対照群の各因子の「事前・事後」の平均と標準偏差は、表 4 のとおりである。平均得点の変化を図 1 から図 4 に示した。両群の得点変化を検討するため、各因子ごとに、群（経験群・対照群）と測定段階（事前・事後）を要因とする二要因の分散分析を行った。その結果、「いのちの大切さ」「自然に対する感性」「達成意欲」については、表 4 に示したとおり、いずれも測定段階（事前・事後）の主効果に有意差が見られた。

『思いやり』については、群の主効果に有意差が見られたが、測定段階には有意差が認められなかった。そこで、下位検定として、群別に一要因の分散分析を行った結果、「いのちの大切さ」「自然に対する感性」「達成意欲」については、経験群の測定段階（事前・事後間）に有意差が見られ、対照群には有意差が見られなかった。

《一要因の分散分析結果》【経験群】「いのちの大切さ」(F (1, 44) =7.22, $p < .01$)、「自然に対する感性」(F (1, 45) =12.09, $p < .001$)、「達成意欲」(F (1, 45) =8.06, $p < .01$)

すなわち、経験群と対照群の「いのちの大切さ」「自然に対する感性」「達成意欲」の比較では、経験群は事業終了後に有意な変容を示したが、対照群は変化がなかった。

表4 経験群と対照群の分散分析結果（2要因）

		事前		事後		F 値		
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	群間	測定段階	交互作用
いのちの大切さ	経験群(n=45)	19.91	3.10	21.13	4.23	2.33	4.59*	3.82
	対照群(n=71)	19.37	4.54	19.42	4.13			
自然に対する感性	経験群(n=46)	35.72	5.97	37.33	5.63	4.81*	4.58*	3.70
	対照群(n=70)	33.64	7.37	33.73	8.35			
達成意欲	経験群(n=46)	29.89	5.38	31.48	4.91	1.45	7.28**	2.90
	対照群(n=67)	29.21	6.32	29.57	6.50			
思いやり	経験群(n=46)	10.87	2.52	10.83	2.27	11.09***	0.80	1.24
	対照群(n=72)	9.32	2.35	9.72	2.33			

※経験群については、小学生の参加者のみによる分析 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

近年、青少年が絡んだ重大な事件が相継いで発生している。事件の原因・背景は様々であるが、自他の生命のかけがえのなさについての実感が欠けていたり、自己の感情を適切にコントロールできないなど、自己抑制力の欠如などが指摘されている。

本研究では、『いのちの大切さ』とは、生命一般に対する尊重の念と合わせ、自尊心や自己肯定を含んだ心情と定義した。「いのちの教育」とは、「いのちのかけがえのなさ、大切さ、すばらしさを実感し、それを共有することを通して、自分自身の存在を肯定できるようになることを目指す教育的営み」⁶⁾である。このような「いのちの教育」の実を高める場として、他者と関わり合いながら集団で展開される自然体験活動は、生きた自然や生命の不可思議さを実感したり、自己をかけがえのない存在として肯定し、人の役に立っているという認識を育くみ、自身が社会的に支えられながら他者との関係性の中で生きていることを感得する活動として極めて重要であると思われる。

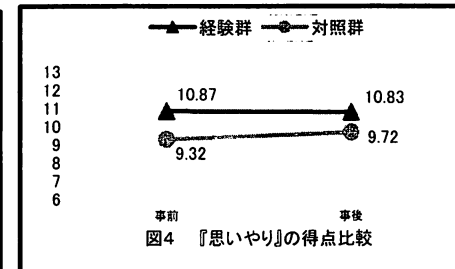
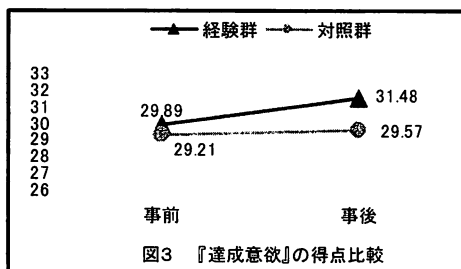
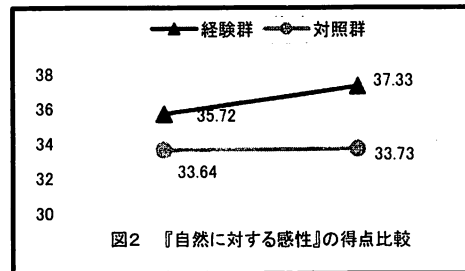
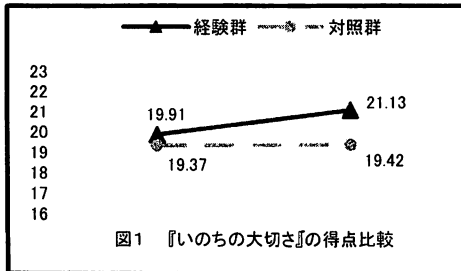
また、感性は、一般に「周囲の環境からの刺激に対する感受性やそれに対応する心の動き」、あるいは、「刺激に対する敏感さ（感受性）や驚きの反応であり、価値あるものに気づく感覚」⁷⁾と定義されている。すなわち、感性は興味や関心、価値観、感得、鑑賞、感情、態度などで表現される心情の要素を含んでおり、物事の価値や質について主体的に気づき、感じる力であると考えられる。

自然体験活動が「自然に対する感性」に及ぼす効果に関する研究は、これまで針ヶ谷⁸⁾、澁谷⁹⁾、飯田ら¹⁰⁾が、キャンプによる効果を報告している。

自然体験活動は、自然の多様な営みや現象に直接的に触れ合いながらの生活・活動であり、ふだんの教室とは異なる開放的な空間は、子どもにとっては未知の世界である。予測

不能な不可思議な事象や対象に対して、一人ひとりが興味・関心を引き起こされ、そこから五感を通じた発見や気づきをもたらされていると推察することができる。

「達成意欲」については、本研究では優れたことや自分自身にとって困難なことを成し遂げ、目標を完遂しようとする意欲と定義した。動機づけは、主に「認知」「情動」「欲求」によって説明されることが多く、これらが相互に影響を及ぼし合い、意欲を高めていくものと考えられている。



このたびの長期自然体験活動では、各プロジェクトがグループ毎の主體的、自律的な生活や活動を展開しながら、メインとなる達成目標に向けて努力を続けた。すなわち、「森の遊び」プロジェクトXは基地作り、「森の冒険」プロジェクトXは、現地泊を伴う登山、「森の科学」プロジェクトXは植物・昆虫観察、水生生物調査、天体観測、「森の生活」プロジェクトXは、連日テント泊による自然生活、そして、「森の芸術」プロジェクトXは、ツリーハウス作りをそれぞれ達成目標として掲げ、その実現に向けて取り組んだ。

自然体験活動と達成動機に関する研究では、飯田ら¹⁰⁾が、キャンプ終了時に「達成動機」が向上したことを報告しており、長期自然体験活動は、数多くの不安や困難の一つひとつに立ち向かい、克服し、成功体験の蓄積が向上につながったとしている。

参加者の約8割が自ら参加を決めてこの長期の自然体験活動に臨んだ。参加するプロジェクトも自分の興味・関心に応じて、それぞれ選択を行った。すなわち、活動への期待と活動そのものに対する本人の価値観は非常に高く、プロジェクトの仲間に受け入れられ、仲良く活動したいという対人的欲求、自ら選んだ活動に対する成功可能性と見通しなど、内発的な動機づけが大きく影響しているものと考えられる。

一方、「思いやり」は、本研究では他人のためになるようなことをしようとする自発的な行為と定義した。思いやり行動とは、対人関係を円滑なものにする社会的スキルである。このような行動の発達には、ある状況下で自分がどのように行動したらよいかを決定する判断力としての「向社会的判断」、相手を理解する能力としての「共感性」、相手の立場に

立つ「役割取得」能力が挙げられている。「向社会的判断」をベースに具体的な思いやり行動がとられる場合、共感性や役割取得は、この動機づけの働きをすることを考えられている。

長期にわたる自然体験活動においては、仲間と共通の活動を体験しながら困難への挑戦や課題解決などを求められることから、情動の共有を通して「共感性」の発現や「役割取得」がなされることが推測されるが、調査結果からは、経験群・対照群ともに、有意な変化が見られなかった。

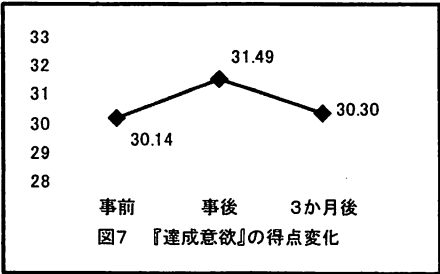
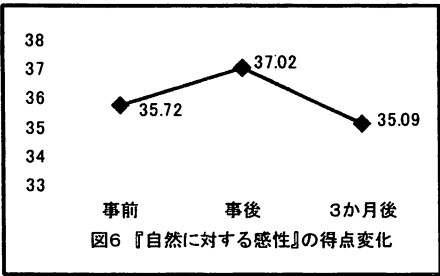
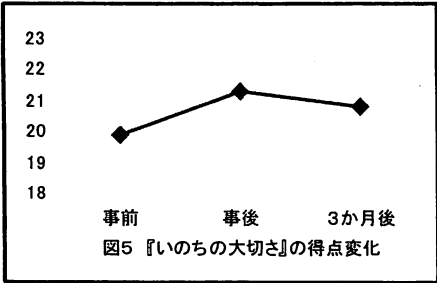
2 参加者（経験群）の変化

表1の参加者に対し、事前、事後、活動終了から3か月後の計3回にわたり、質問紙法による調査を行った。表5に、各因子の測定段階における平均値と標準偏差を、図5から7に平均得点の変化を示した。

	表5 経験群の分散分析結果							
	事前		事後		3か月後		F 値	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
いのちの大切さ (n=42)	19.83	3.09	21.26	4.02	20.79	3.78	3.84*	
自然に対する感性(n=43)	35.72	5.39	37.02	6.01	35.09	5.90	3.18*	
達成意欲 (n=43)	30.14	4.25	31.49	4.86	30.30	5.69	2.58+	

* p < .05 +.05 < p < .10

分散分析の結果、「いのちの大切さ」「自然に対する感性」では、測定段階（事前・事後・3か月後）が有意であり、「達成意欲」では有意な傾向が見られた。



有意差の見られた因子について、LSD法による多重比較を行った結果、「いのちの大切さ」では、測定段階の平均の大小関係は、「事前<事後」(Mse=5.79, 5%水準)、『自然に対する感性』では、「事前<事後>3か月後」(Mse=13.10, 5%水準)であり、いずれも事後に有意

に向上を示した。「自然に対する感性」では、「3 か月後」には「事後」と比較し有意に低下した。「達成意欲」では、測定段階の平均の大小関係は、「事前<事後」であった(Mse=9.03, 5%水準)。

3「参加者の特性」と各因子との関連による比較

参加者の特性と各因子との関連を検討するため、「ふだんの遊びや体験活動」の多いグループを「体験活動多群」、これらの少ないグループを「体験活動少群」に、またこの活動に初めて参加した者を「初参加群」、複数回参加者を「リピーター群」としてそれぞれ両者を比較分析した。

(1)「日常の遊び・体験活動」と各因子との関連

「体験活動多群」「体験活動少群」と各因子との分析の結果は、表6のとおりである。

表6 体験活動経験と各因子の分散分析結果

		事前		事後		F 値		
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	群間	測定段階	交互作用
いのちの大切さ	体験活動多群(n=22)	19.73	2.83	22.36	3.89	1.96	11.06**	11.98**
	体験活動少群(n=19)	19.63	3.20	19.58	4.03			
自然に対する感性	体験活動多群(n=22)	36.00	6.02	38.45	5.21	1.25	8.20*	0.17
	体験活動少群(n=20)	34.80	5.86	35.65	7.16			
達成意欲	体験活動多群(n=22)	29.64	4.77	32.91	4.63	0.49	7.49**	7.96**
	体験活動少群(n=20)	30.35	4.16	30.30	5.54			

* p < .05 ** p < .01

各因子における両群の事前・事後間の変化を見るため、分散分析を行った結果は、「いのちの大切さ」「達成意欲」では、測定段階（事前・事後）と交互作用に有意差が見られ、「自然に対する感性」も測定段階に有意差が認められた。そこで、両群の事前と事後間の変化について、t 検定を行った結果、「いのちの大切さ」「自然に対する感性」「達成意欲」のいずれにおいても、「体験活動多群」の平均の差が有意であり、「体験活動少群」には変化が見られなかった。

《t 検定の結果》「いのちの大切さ」（両側検定：t (21)=-4.58, p < .001)、「自然に対する感性」（両側検定：t (21)=-3.40, p < .01)、「達成意欲」（両側検定：t (21)=-3.55, p < .01)

「いのちの大切さ」では、日常の遊びや体験活動が多いグループが、そうでないグループと比べ事後に向上が見られたことは、体験活動の積み重ねによる人との関わりやコミュニケーションなどの社会スキルが身に付いているなど、これまでの体験活動量の影響を示唆しているものと考えられる。また、「自然に対する感性」では、これらの子どもたちが活動的であり、自然や自然の変化を肯定的に受容できたためと考えられる。

「達成意欲」では、「内発的動機づけは、過去の情動体験の積み重ねが現在、あるいは将来の行為に影響することも少なくない」¹¹⁾ ことから、これらの成功体験や情動体験の積み重ねが有意な変容をもたらす一因になったと思われる。

また、毎日の区切りとして実施した「振り返り」は、各自の行為や疑問に内省の機会を与え、自己表現、対人的なかかわり、目標達成に向けた方向性の示唆などが達成動機の変

容に有効に機能したと考えられる。

(2)「遊学キャンプ」への参加経験と各因子との関連

「初参加群」「リピーター群」と各因子との分散分析の結果は、表7のとおりである。各因子について、両群を分散分析した結果は、「いのちの大切さ」「自然に対する感性」「達成意欲」のいずれでも測定段階に有意差が見られた。そこで、事前・事後の平均の差について、t検定を行った結果、「いのちの大切さ」「自然に対する感性」では、「初参加群」に有意差が見られたが、「リピーター群」には有意差が見られなかった。

「達成意欲」については、「初参加群」に有意差が見られ「リピーター群」には有意傾向が見られた。

＜t検定の結果＞ 「いのちの大切さ」初参加群（両側検定：t(25)=-2.70, $p < .05$ ）、「自然に対する感性」初参加群（両側検定：t(26)=-3.32, $p < .01$ ）、「達成意欲」初参加群（両側検定：t(26)=-2.37, $p < .05$ ）、同リピーター群（両側検定：t(17)=-1.94, $.05 < p < .10$ ）。

表7 参加経験と各因子の分散分析結果

		事 前		事 後		F 値		
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	群間	測定段階	交互作用
いのちの大切さ	初参加群 (n=26)	19.23	3.01	20.92	4.17	0.11	8.86**	0.71
	リピーター群(n=18)	19.94	2.96	20.89	4.42			
自然に対する感性	初参加群 (n=27)	34.67	5.94	36.89	5.51	0.60	8.67**	0.73
	リピーター群(n=18)	36.50	5.64	37.72	7.01			
達成意欲	初参加群 (n=27)	29.89	4.68	31.63	4.95	0.15	9.32**	0.14
	リピーター群(n=18)	29.11	5.31	31.33	5.46			

**p < .01

長期の自然体験活動に初めて参加した子どもたちが、事後に変容を示したことは、自然の現象や自然界での活動が多くの子どもたちにとって新鮮であり、9日間を頑張れた達成感や充実感が影響しているものと推測される。

IV まとめと今後の課題

本研究の結果は、次のとおりであった。

- 長期の自然体験活動参加者の「いのちの大切さ」「自然に対する感性」「達成意欲」は、それぞれ活動終了後に向上した。
- 「思いやり」については、活動終了後の参加者の変化は見られなかった。
- ふだん、遊びや体験活動の機会が多い参加者とこれらの少ない参加者の比較では、活動機会の多い者が活動終了後に、「いのちの大切さ」「自然に対する感性」「達成意欲」がより向上した。
- 初参加者とリピーター参加者の比較では、初参加者が活動終了後により「いのちの大切さ」「自然に対する感性」「達成意欲」が向上した。

次代を担う青少年を豊かに育てていくためには、人間形成の基礎としての学力をはじめ、日常生活における多様な体験学習の機会を通して、協調性、コミュニケーション・表現能力、思いやりなど、他者と適切に対応できる社会性を培っていくことが欠かせない。また、科学技術や情報化が一層進展する社会においては、青少年の資質・能力として、自然や他

者に対する豊かな感性を育んでいくことは極めて重要である。

今回の調査研究から、長期の自然体験活動を通して、「いのちの大切さ」「達成意欲」「自然に対する感性」などが、活動終了後に多くの子どもたちに変容をもたらすことが明らかとなった。すなわち、これらの情意面を涵養するに当たり、集団活動を通じた自然体験活動の有効性を検証することができた。

また、これらの持続性については、3か月後まで持続されることはなかったが、日常、遊びや体験活動の機会が多い子どもたちほど事後に変容を見せたことから、情操や情意面の発達には、豊かな経験の蓄積が大きく関与し、これらが状況に応じて触発され、その時々生きて機能するものと考えられる。

近年、学校教育や地域においても体験活動の充実が図られつつあるが、子どもたちを人間性豊かに育んでいくためには、これらの機会が不十分な多くの子どもたちのさらなる機会の拡充を図っていくことが不可欠である。

子どもたちの情意面の発達や変容には、自然体験活動における指導法や指導者・ボランティアなど、参加者と直接関わる大人のモデリングとしての役割、プログラムの内容等も大きく関与することが予測されることから、さらにこれらとの関連についても研究を進めていく必要がある。また、今回抽出された「因子」の精度をさらに高め、青少年の豊かな人間性に欠くことのできない資質・能力と自然体験活動との関連について、さらに調査研究を深めていくことが課題である。

<注記・引用文献>

- 1) 発達心理学辞典 岡本夏木他監修 ミネルヴァ書房 1995
- 2) 学校教育辞典 東 洋他編 教育出版 1988
- 3) 菊池章夫「思いやりを科学する 向社会的行動の心理とスキル」向社会的行動尺度児童版（佐藤かおり）川島書店 1988 pp.73-75
- 4) 堀 洋道監修、吉田富二雄編「心理測定尺度集Ⅱ 人間と社会のつながりをとらえる＜対人関係・価値観＞」達成動機測定尺度（堀野 緑）サイエンス社 2001 pp.63-67
- 5) LSD 法による多重比較：Least Significant difference の略で、「最小有意差」の意味。有意水準をクリアする最小の幅（LSD）を求める。また、「多重比較」とは、3つ以上の平均がある場合に、2つの平均ずつを対にして「多数回の比較」を行う。
- 6) 近藤 卓編「いのちの教育 はじめる・深める授業のてびき」実業之日本社 2003 pp.14
- 7) 片岡徳雄「子どもの感性を育む」日本放送協会 1990 pp.74-75
- 8) 針ヶ谷雅子「キャンプの効果に関する研究ー自己受容および感性の視点からー」東京学芸大学大学院教育学研究科修士論文 1994
- 9) 澁谷健治「キャンプが児童の感性的自然認識・イメージ・態度に及ぼす影響」筑波大学大学院体育研究科修士論文 1995
- 10) 飯田 稔、関 智子、黒澤 毅『自然体験活動「心のふるさと村」が参加者の達成動機・友達づき合い、自然に対する感性に及ぼす効果』文部省委嘱事業 子どもの「心の教育」全国アクションプラン「心のふるさと村」報告書 国際自然大学校 1999
- 11) 上淵 寿 編著「動機づけ研究の最前線」北大路書房 2004 pp.3